

## クダーにおけるシャム人とタイ仏教寺院： 寺院調査から（4）（了）

黒 田 景 子

### 12. スンガイパタニ（Sungai Patani）地域の寺院（前稿に続く）

#### 2) Wat Lengkas

正式名称：Wat Sanggararam

位置情報：北緯5度42分17秒 東経100度39分19秒

標 高：25m

立地と景観：ムダ川に接している。もともとは河川交通利用であったことがわかる立地。周囲はゴム林。しかし、道路では非常にわかりにくい場所にある。この寺に至るには、k169号線を奥まで入り、FELDA 開拓村の横をさらに奥に入って車一台しかとおれない生活道路を川にそって700mほどはいる。川に面した階段の横に看板があって寺の敷地に入る。シャム人の村は寺をとおるすぎてさらに奥にはいる。バイクの通行が多い。

歴史と伝承：Lengkasは Teloiと呼ばれる地域の一部にあり1963年の記録には登場しないが、古くからのシャム人の居住域である。聞き取りでは村はだいたい200年ほどで、1950年代には強制移住を経験し、そのときにムダ川対岸の商業地 Bkt Selembauへ移動させられたという。またこの時期のクダーの文書記録によれば、警察がLengkasの村に来たところだれも居らず、あわてて立ち去った後があり、当時警察はここを強盗の根城と判断している。

聞き取り調査にもどると、家は以前150家ほどあったがいまは30家ほど。ほとんどがシャム人で、中国系との混血もあるが、タイ語で生活している。Bkt. Selembauの寺とは移動の関係で近しく、以前は川を渡る船で対岸にわたりしょっちゅう行き来していたという。

僧侶：住職は1名。2008年の前半までは出家者は5名であったが、還俗して仕事にもどった。

寺院内施設：本堂が壊れたというので新しい建物を建設中である。セーマーは古いまま存在。労働者は3名で一人はウドンラーチャターニーから来ているタイ人である。もう一人いたが母が病気になったので帰国中。そのほかは村の人が手伝いをしている。

高床式の民家の庫裡、コンクリート平屋の講堂。オフィスにしているコンクリート作りの平屋。奥には木造の一時出家者の住居用の小屋がいくつか建ち並んでおり、労働者はそこで寝泊まりしている。あたらしい鐘楼がある。

寄付像としては釈迦立像。タイから購入した四面仏とその祠。寄付名はすべて華人である。黄色い布を巻かれた土の塊である土地神。供え物はダトクラマットと同じである。

門はないが、看板の脇に川に降りる階段がある。ローイカトンの祭をして灯籠を流すために階段は広い。

現在僧侶が一人であるため、食事は村の人が自宅で作って持ってきている。



[写真119. 講堂]



[写真120. 住職の庫裡]



[写真121. 住職に食事を運ぶ]



[写真122. 川へ降りる階段]

### 3) Wat Bukit Selembau

正式名称：Wat Samagghiratanaram

位置情報：北緯5度41分30秒 東経100度39分19秒

標高：27m

立地と景観：クダールの内陸の起点Jeniangから南に走る幹線道路K17はムダ川西に並行して走る。この道は南部への物流動脈でトラックの産業道路化しており、あたりはゴムとアブラヤシと川沿いの水田である。Bkt. Selembauの街はトラックが休憩や修理にたちよる華人商店街で、こぢんまりした商店街に車の修理店や雑貨、食堂が並ぶ。その商店の裏西側に区

画整備された住宅街がある。住宅街のさらに西側の丘の上にさほど大きくない寺院がある。商店街の中央の裏に位置する。

歴史と伝承：寺の別名はWat Klong Changともいうようで、1963年の記録によれば、寺は1953年に建てられた。このあたりの華人は福建語を話す。また、シャム人やその血を引く者もいるようで、タイ語もある程度理解する。マレー人やインド系の姿もみる。聞き取りによると、華人とシャム人の街であり、マレー人はその周囲に住んでいると言われた。寺院が出来たのは30年ほど前であると言われる。

僧侶：3名。丁度僧侶に呪いをしてもらいにきた親子と会う。僧侶の手から糸を垂らして親子の手にかけ、呪いが伝わる様になっている。僧侶みずから「イサーン（東北タイ）のようだ」と笑う。

寺院内施設：コンクリート製の門あり。寺院境内は舗装されており、2階建ての講堂の一角に僧侶は居る。向いにもう一つ建物があり双方とも2000年頃のものである。

タイ様式の本堂はなく、寄付像も象の像があるのみ。1963年当時から本堂はなくて講堂でタイ語の授業をおこなっている。この講堂は戦時に地域住人の避難場所ともなって200人が集まったそうである。

Wat Lengkasと関係が深く、Lengkasの住職がいなくなったときには、ここから僧侶を派遣したという。



[写真123. 門]



[写真124. 講堂]



[写真125. Bkt Selembauの街並み]

#### 4) Wat Tramadu (Oramadu)

正式名称：Wat Buddhayapatitharam

位置情報：北緯5度32分24秒 東経100度34分25秒

標高：19m

立地と景観：ムダ川はタイ国境に源流を發し、パダントラップからクダーの内地の中心を南に流れ、スンガイパタニの南部で西に流れをかえて河口に至るが、この寺院はその丁度流れが西に向かった蛇行するムダ川沿いにある。道路では、スンガイパタニから東に延びる67号線の途中でK824号線に南進する。道はアブラヤシのエステートがえんえんと続き、三キロほど

いってゴム林にかわって一キロほどの地点に寺院がある。

歴史と伝承：伝承ではこの地域のシャム人の村としては230年以上立っているという。シャム人の村は川沿いに広がっている。寺が作られたのは1843年頃タイではラーマ3世時代であるという。川沿いに立地する。

僧侶：僧侶は3名。1963年の記録では僧侶は7名でサミが2名であった。

寺院内施設：木造が大半の古い施設だが建物の配置のおちついた寺である。本堂はコンクリート造りでセーマーには覆いの祠がついたタイ様式である。説教堂、庫裡は高床式で共同住居。屋根に漆喰で守護鬼像が造られている。一時出家者用の小屋型庫裡もある。講堂と食堂を兼ねる建物の前にマレー語で「皆の協力」を訴える看板が目立つが、また英語と中国語とタミール語で「土足ではいらないうでください」という板がある。またタミール語でドネイション料金も書いてある。仏塔は建て替え中である。木造の高床式の経堂がある。門もささやかだが木造。創始住職像とプートンは同じ建物内におさめられ、老人が参っていた。

寄付像は、ルシ像、観音像、巨大なコンクリートの手製の布袋像、華人の祠にダトクラマットらしい小座像。タイの御座船をかたどった舟形の像。また、あちこちにパイナップル型の飾りや蠟燭があるので、福建人系統とわかる。庫裡の中にも華人神やその飾りやその供え物が見える。四面像は庫裡の一角に寄付された小像のほか、壁画として手書きのものがあり、参拝者は、そのいずれにも参っている。

ローイカトンの祭で川に灯籠を流す用意がしてあった。

入り口の左の建物では華人式の足裏マッサージの店が併設。



[写真126. 庫裡]



[写真127. 経堂]



[写真128. 布袋像]



[写真129. ローイカトンの灯籠]

## 5) Wat Tana Lichin

正式名称：Wat Seluang

位置情報：北緯5度34分24秒 東経100度34分25秒

標 高：23m

立地と景観：Wat Tramaduの接するムダ川を7kmほどさかのぼった川沿い東側にある。ただし、アブラヤシのエステートの真ん

中にあり、道路で到達するにはKuala Ketilから南下するK21号線に入り、Kg.Titi Panjangで未舗装のエステートの中にはいって4kmほどまがった道を行く。途中で小さくWatへの矢印があるのでそれにしたがう。この未舗装道路では村の姿は見ない。アブラヤシの植え替え中で荒地地様になっているところに鉄条網で囲われた一角があり、その奥に寺院がある。

歴史と伝承：伝承を知っているものに出会えず。1963年の記録にも名前はない。先住住職の墓が5基あるので、寺ができて100年内外かもしれないが不明。以前は村にもっとシャム人が居たが、仕事を探して出て行ってしまい、村の人数が減っているとのこと。

僧侶：2名。40代後半の僧侶は、タイ人、アユタヤ出身でパタヤでスピードボートの運転手をしていたという。タイ語とマレー語を話す。若い僧侶は出家して3年目で地元出身だが、シンガポールで働いていたことがあり、日本語が少しできるのがうれしげ。

寺院内施設：二階建ての本堂を今建築中である。村の人の手伝いが数人いたが、僧侶2名が自ら建築している。門は先に完成していてタイ様式の青いガラススタイル、金の飾りである。地元一般民家の形そのままの講堂や庫裡が3棟ある。1969年に84才でなくなった僧侶の墓碑銘がプートンの前に立てられている。仏像が安置されている仮の本堂には、小サイズの誕生仏7体も並ぶ。

寄付像としては数年前に建てられた観音像がある。





[写真130. 寺前の立地]



[写真131. 僧侶二名で建築中]

### 13. クリム (Kulim)

地域の特徴：クリムはクダーのもっとも南の地域で、ペナン州のマレー半島側のスブランプライ地区と接している。この20年ほどのペナン州スブランプライは工場地域としての発展がめざましく、高速道路や工場、新興住宅がひしめいている。この地域への通勤圏にあたるため、クリムもまた工場、オフィスビル、新興住宅地などの建設が盛んで、調査中の三年でも景観は激変している。すなわち、クダー南部の大資本によるエステート地区が開発されて、ゴム林、アブラヤシ林が切り倒され、タマンとよばれる住宅地開発が盛んである。タマンには赤い屋根と白い壁の典型的な一戸建てや長屋作りの建物が多く、中心部にスーパーマーケットを中心とする商店エリアが企画され、昔のショップハウス型の華人商店街を中心とするクリムの中心からドーナツ状に人口移動が始まっている。この地区にはシャム寺院は2つ記録されていたが2007-2009年までに所在がわかったのは1つであった。



[写真132. 補欠選挙風景 PASの旗]



[写真133. 補欠選挙風景UMNOの旗]

## 1) Wat Kulim

正式名称：Wat Phrathad Punya Suntharam

位置情報：北緯5度26分16秒 東経100度31分59秒

標高：37m

立地と景観：ペナン州を走る国道1号線からクリムに向かう幹線道路 Jalan Kulim はペナン州ではP12号線，そのままクダール州にはいってK12号線と名前を変える。

K12号線の周囲にはペナンへの通勤圏となる数々のタマン（郊外住宅地）がぞくぞく建設され，一面住宅地である。K12号線がペナンとの州境から50mほど入ったところにあるニュータウン，タマン・チェンガルの前を北に100mほど北へ入ったところの，緩やかな未開発のはずれの丘陵にある。

歴史と伝承：この寺はクダールの他の寺と性格が異なる。上座仏教寺院であり，僧侶はタイ系であるが，實質は，仏教徒モン人のための寺である。寺の基礎は25年前にすでにあったが，今の場所に本格的に建築を始めたのは1991年である。説明によれば，現住職が瞑想のなかで南タイのソクラー，パタニ，

ベトンを歩かれたという400年前の僧侶に出会い、この場所にビハラーを設けるという計画をもった。住職とその協力者の僧侶の二人で、土地局にかけあって二次林ジャングルの一隅を確保し、1993年にタイ領事館から承認を得て、ここにまずちいさな庫裡を作った。2002年に諸施設のコンクリートの建築を始めたが2009年現在、本堂は建築中でまだ完成していない。

僧侶：住職は創始者であり、Luang Phor Kruba Sri Sacca Moni という。父はマラッカのババチャイニーズ、母がタイ人。サミは5名。

寺院内施設：この寺院はThai-Mon寺院という特徴がある。全体に寺にはモンと華人のミックスした様子が濃い。近所にモンの村があるわけではないが、マレーシアに亡命しているモン人（ビルマ人ではない）の支援を行っている。寺の様式は、僧侶 Luang Phor Kruba Sri Sacca Moni のデザインによるもので、タイ様式の三重屋根、柱に中華の龍、パゴダはモン風という混淆様式である。華人が資金をだし、労働力はモン人が提供した。

調査日はたまたまモンの寺院によくあるというクジャクのついた柱の序幕式の日で、午後はモン人のロックバンドが寺内で演奏し人々をねぎらっていた。そこにはKLからきた Mon Refugees Organization の人がおり、ミャンマーの現状から逃れて亡命してきたモン人の福利厚生への援助を行っている事務所を運営しているといっていた。クアラルンプルの Pudo Plaza の9th に事務所がある。

僧院は華人の寄付とタイ系地元人によって食事などを提供されている。

建設中の本堂、コンクリートの説教堂、僧侶の庫裡がある。

本尊も白のめがねをかけたビルマ仏とひらたい鼻をしたモン仏である。

寺内の施設は、太鼓楼。パゴダ。巨大僧侶像。住職像あるが、そのほかに多数の寄付像あるいは、モン風の像が多い。

ターマニヤ山のレプリカ、観音、三つ目のルシ、四面仏（タイのものと説明される）、布袋、唐子、金銀の袋を持ちカニにのる僧侶。獅子にまたがる住職自身の像。馬にまたがったモン王像、女性が乗っている象、クジャクがついた柱。人魚と髪を洗う女性と蛙型の貯金箱と銭を啜えたガマのいる池。岩山の洞窟の修行僧、岩山と水鳥をあしらった庭。手作りのガネーシャ像。孔子廟のようなもの、福ひょうたん、ダトクラマットの瀬戸物像二つ（緑色）、子宝観音らしい女性像、タイの寺院にあるというコンクリートと木彫りのペニス像が立てかけてある。男と英雄の子供の像（モン風か）あり。売店には線香や、華人系縁起もの、占いをする案内などあり。俗信・民間信仰由来のものが非常に目に付き、モン由来らしいものがあってよく分からない点もある。

また、僧侶は死ぬ前に出家したその母のミイラを室内に安置している。母は2009年8月始めに亡くなったが遺体はそのままガラスケースに座像として安置され祭壇をもうけて完全なミイラ化を待っている。完全に乾燥するまでにあと数ヶ月かかるそうで、ときどき皮膚に油を塗るそうである。当然のことではあるが、蠅が多く、濃厚に香をたきしめていた。

僧侶とこの寺に関しては、華人の読む仏教雑誌に紹介されたことがある。上座仏教徒でない華人だが、この寺のことなど、「暹羅佛教寺院」に関する特集雑誌などが数冊でていて、大型ショッピングモールの書店などで簡単に入手できる。



[写真134. Mon-Thai寺院の趣旨]



[写真135. 建設中本堂]



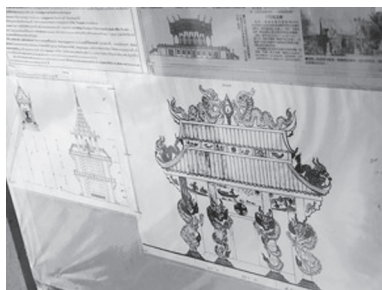
[写真136. ガネーシュ像]



[写真137. ターマニャ山像]



[写真138. 未完成本堂内で眠る労働者]



[写真139. 僧侶デザイン完成図]



[写真140. モン系民間寄付像]



[写真141. 住職とモン人の世話役達]



[写真142. モン王像]



[写真143. 住職母堂の乾燥中ミイラ]



[写真144. 施設完成の祝賀会]



[写真145. 売店の有名僧侶像]

#### 14. バリン ( Baling ) 地域の寺院

地域の特徴：クダー州の南東の山地。タイ国境とペラ州と接する。ムダ川合流するKetil川は東にさかのぼってペラ州境近くの中心街バリンで北に延び、源流のBukit Ketilに至る。道路網はこの川沿いに古い道路が発達しており、バリンの街は特徴的な牙様の山岳が目印になる。

川沿いの地域以外は標高の高い山地で、村々も山地のアップダウンの激しい山間に存在する。まだ個人所有の小規模なゴム林が多い。しかし西のスنگガイパタニに近くなると大資本のアブラヤシエステートが多くなり、しだいに工場、住宅地のための開発地に転換中である。

バリンはクダー州の端でタイとペラ州の国境、Bkt Seluang（タイ側ベトン）まで幹線道路が通じているということもあるのか、19世紀の記録にすでにシャム人の集落がでてくる地域である。

地域の伝承によれば、この地域のシャム人は、アユタヤ時代にナコンシータマラート方面からやって来たという説がひとつ。350年の伝承をもつ村があるという。また、後年タイのナコンシータマラートがクダーを占領していた1821-39年の間に多くのタイ人移住者(兵士)を送り込みそれがこの地域のシャム人の出自であるとも言われている。タイの年代記類にはそのような記載はいずれもみあたらない。



[写真146. バリン風景]



[写真147. しばしば牛に出会う]

## 1) Wat Kg Tas

正式名称：Wat Barn Tas

位置情報：北緯5度42分18秒 東経100度47分0秒

標高：70m

立地と景観：この寺院のあるK15号線はSikから南下し、Parit Panjangの大きな変形五叉路で山に沿うようにバリンへ向かう道である。Parit Panjang周辺にはマレー人ムスリムのポンドックもあり、そこから2kmほどバリン川の登り道を行ったところで寺の存在を示す看板がある。まわりはゴム林であり村落の存在は気がつかない細い未舗装道路車一台通行可能を100mほど入る。手前にシャム人の村Kg.Thai Tasがある。

歴史と伝承：村は100年ほどで48家ある。1963年の記録には出てこない村である。寺は出来てから45年ほどになる。山腹のなだらかな所を切り開いてあり、寺の前の道は主としてバイク道としてさらに奥に伸びる。

1990年にこのKg.Tasの調査を行った中澤政樹によればKg TasはK15号道路で分断されている二つのシャム人の村からなる。山側がKg.Tas、反対の低地の奥にあるのがKg.Pagangである。Tasの別名は開拓者の名をとってKg.Din Tongと呼ばれることもある。中澤の記録ではKg.Tasの人口は300人、58家であるから、二十年足らずの間にさらに人口が減少したことになる。Kg Tasの歴史はKg.Pagangと結びついているので、1963年の記録にPagangの名があってもTasの名がないという状況は両者を一つのシャム人エリアとみなしたと理解できる。

この村の最初の創始者は、NakaのKg.Pakra生まれでKg.Kura生まれの妻をもつDinTongである。1910年代に「HaaNaaDii」つまり良い土地と環境を求めて南下し、



Pagangに居着いた。ここのシャム人移住者はクダーのSikなどの東北部からの二次移住である。村は1920年になると、近隣のシャム人集落であるKg.SirakoやバリンのKg.Tasekに婚姻によって転出するものが出始める。TasとPagangでは水田と果樹の収穫があったが、極めて狭い土地でもある。Pagang川のそばの最初の地域が一杯になると、山側のKg.Tasに民家ができはじめた。村の創始者である者が村長になるという、典型的な山間タイ人村落移住パターンが見られる。

現在のKg.Tasは道路網から見るとPagang同様、どうみても不便な場所に立地する。実はK15道路は一九七〇年代に立ち上がったプロジェクトの産物で村を分断する形でParit Panjangからひたすらまっすぐにバリンへ向かう。この道路建設がもともとひとつのシャム人エリアであった Kg.TasとKg.Pagangを分断したという。

寺院はKg.Tasに1941年に建てられ、Kg.Pagangには1949年に建てられた。

僧侶：一名。チエンライ出身で、この地に25年居る。マレー語もたくみである。

寺院内施設：村のコミュニティの中心となっているらしく、多数の建造物がある。現代タイ様式で建てられた本堂（近年のもの）と民家風の庫裡、二階建ての講堂、学校に使う集会所、タイ風の門。鐘楼。サーラー。

寄付像は観音像、2006年に建てられた四面仏。招福娘像。その他、本堂への階段に北部タイ風の龍の飾りがついている。

入り口に特徴的な建物がある。すべて緑と茶色、黒のビール瓶を煉瓦代わりにつかってたてた祠で、中にはダトクラ

マット陶器像2体，虎像一対，ブートンがおさめられ土地神の祠としてまとめられているようでもある。僧侶によれば，瓶もすべてタイから持ち込まれたもので，チエンライに同様の瓶で作った寺があり，僧侶の出身地であるチエンライからやってきた労働者が作ったということ。



[写真148. 庫裡と講堂]



[写真149. 近年完成した本堂]



[写真150. ビール瓶材料の祠]



[写真147. 門はしばしば若者のたまり場]

## 2) Wat Pagang

正式名称：Wat Rattanaram (Samnaksom)

位置情報：北緯5度46分90秒 東経100度47分74秒

標 高：61m

立地と景観：Kg.Tasの出口からK15号線 のを横断して低地に入る。Tas のところで述べたようにこの二つの村Kg.TasとKg.Pagang はもともと同じシャム人エリアである。低地の道は車一台 入れる程度の道を2kmほどは言ったPagang川の細い川辺 に集落と寺院敷地がある。

歴史と伝承：Kg.Tasと村の成立と移住伝承を共有している。1970年代に k15号線とk154号線などのまっすぐな道路ができて、もとの川辺の村の景観を変化させてしまったため、シャム人集落だけではなく、マレー人集落も、幹線道路へのアクセスで影響を受けた。Kg.Pagangは幹線道路三つの丁度三角形の真ん中に位置することになって孤立した状態にある。寺院は1949年にたてられ、1957年に移動改築。1963年の記録(道路建設前)では、80家族、500人がいたというが、その当時は1960年から僧侶がタイ語を教える学校として機能していた。

僧 侶：現在は住職がいないため、Samnaksom 扱いであって、2007/2008年に二回調査に行ったが施設の扉は閉められていた。

寺院内施設：木造の庫裡が仮本堂となっている。近年たてられたらしい講堂がきれいに維持されているが、屋根の飾りの一部を除いてタイ的な要素のみられないクダールの民家建築である。建物の資金の寄付者名簿があり、バリンのWat Balingの他はパガンの村のシャム人の名前がならび、華人色がない。サーラー一棟。

像も仏座像（タイから購入したものとみられる）のみで、華人色や他の信仰的なシンボルは一切無い。



[写真148. 講堂]



[写真149. 仮本堂内部]

### 3) Wat Sirako

正式名称：Wat Vibulvararam

位置情報：北緯5度41分02秒 東経100度51分07秒

標高：57m

立地と景観：K15号線沿いにあり、大変めだつ位置にある。シャム人の集落は寺の裏側に位置する。山地であるため、小規模な個人所有のゴム林，果樹，わずかの水田。

歴史と伝承：寝釈迦像で有名な寺であるが，村の起源は200年くらい，と伝承は曖昧である。この20年ほどの間に木造の建物がつぎつぎ建て替えられ，新築中の本堂やさらに説教堂の建設計画などがあり，参拝者が多いことがわかる。

僧侶：四名。

寺院内施設：巨大な寝釈迦像をおさめる建物がある。1984年の建立。庫裡と講堂が，一続きの平屋の建物群になっている。本堂は2010年に完成したが，その前の年に調査にいったときに，

ここで本堂建設のために6年働いているという一人のナコンサワンからの出稼ぎタイ人にあっている。彼によれば、もともと3年の約束で来たが人数がへって一人になってしまい、すでに6年ここに滞在しているといい、望郷の念が強い。また、ここのシャム人とは言葉が違うし、ここのシャム人はタイ語の読み書きができないこともあって話があまりできず寂しいといい、自分は食べていくために仕事をしているが、ここのタイ人はまったく寺院建設の手伝いをしないとほやかれた。なぜ、ここに来ることになったかといえば、住職がナコンサワンにきて建設を依頼したので、やって来たという。このように近年の現代タイ様式のきらきらしい建築は、地元僧侶の個人的なネットワークや希望のデザインによって設計図が作られ、それをもとに寺院建設をしたことがあるタイ人労働者をやといいれ建設をまかせることで成立しているらしい。本堂は、彼一人が作っているコンクリート造りであるが、セーマーのかわりに、僧侶像が8つ建っており、結界を示すセーマーの様式にこだわらない。また、隣に仏塔のついた祠も建設中である。

寝釈迦像のある講堂の中には住職像、釈迦や天国の様子を描いたタイ風の壁画群が主として華人の寄付によって飾られている。

寄付像としては巨大なコンクリート造りの修行僧像（これもナコンサワンから来たタイ人の手作り）、手作りの僧侶像、購入した四面像を飾ってある祠がある。



[写真150. 巨大な仏立像]



[写真151. 巨大寝釈迦像]



[写真151. 完成間近の本堂2010]



[写真150. タイ人労働者一人で6年]

#### 4) Wat Baling nok (Paleelai)

正式名称：Wat Phrathad Paleelai

位置情報：北緯5度40分54秒 東経100度55分23秒

標高：62m

立地と景観：バリンの旧市街の端。クティル川が76号線にそってさかのぼり3分岐する点から東へ300mの川沿いにある。中心街の華人系商業エリアのすぐ外である。敷地はこぢんまりとしているが、まわりには公立病院や政府系オフィスの建物がある。

歴史と伝承：村は350年以上の歴史を持つと言われる。1963年の記録で

は人口は100家，600人。寺の回りの地区でさほど大きくはない住宅地である。

僧 侶：8名。

寺院内施設：古い木造とコンクリートの建物が混在しているが，ここも移動の経験がないので，古い寺院建築の様式がもっともよく残っている。現在の礼拝堂は1979年造で木造。内部に巨大な仏像があるが，緑色にペンキで塗られていることからタイのエメラルド寺院の像を模したものと思われる。本堂内に創始住職像。と僧侶像。寄付者による仏陀の一生の壁画が並ぶ。寄付者は華人である。

ならんで，古いセーマーに囲まれた一画に，てっぺんに宝塔をいだいた木造の古いタイプの本堂，美しい経堂（Hotrai）がある。鐘楼あり。この一画は使われているのかどうかかわからない。

屋根にタイ風鴟尾をつけた二階建てのメインの庫裡があるが，他にコンクリート平屋作りの庫裡，木造の庫裡2棟もある。木造の庫裡は高床式である。川に広く接して階段があり，ローイカトンなどの灯籠流しの場所とも思われる。タイ語の学校があり，丁度授業中であった。

寄付物としては，誕生日仏の並ぶ八角堂，4基のプートンを納めた祠，バラモン風の覆いのついた四面仏，ルシ造，小観音像。入り口にタイの首相クオン・リークパイが訪れたときの記念植樹がある。

寺院としてはタイ政府にもよく認知されている有名寺院でもある。



[写真151. エメラルド像を模して緑色]



[写真152. バイセマー内の旧本堂]



[写真153. タイ語学校]



[写真154. クティル川への階段]

### 5) Wat Baling Nai (Simpang Umpat)

正式名称：Wat Phrasrimahapho

位置情報：北緯5度40分54秒 東経100度55分90秒

標高：76m

立地と景観：国道の67号線がバリン市内に至り、そこからペラ州のタイ国境ベトンへ向かう道となると76号線と名前を変える。この道は、標高600メートルの国境の山に向かう道であり、バリンのシャム人がタイから移住してきた主道路ともいわれる。バリン市内にはタイ寺院が二つあり、そのうちの Baling Nai とよばれていた市郊外の寺である。回りは古い



改造沿いの住宅地や学校である。寺の裏側にゴム林が続く。

歴史と伝承：古い村と寺のたたずまいを残した地域である。村は伝承では200年以上と言われている。寺の起源年は不明。1963年の記録では村の人口は300家、1500人。いまま減少傾向だが比較的大きな村である。1950年代の強制移住時代もこの地域は移住を経験しておらず、村と寺のコミュニティ崩壊を経験していない。

僧 侶：僧侶は五名いて、一人が病で入院中。四名は地元出身者だが、ひとりにはペナン出身。

寺院内施設：村人の寄付によってゆっくり本堂の建設中。タイからの労働者を呼んでつくっているそうだが、いまは資金が少なくなっていて、一旦中断中である。古いセーマーが残されていて、覆いがついている。1963年の記録ではこの寺の本堂の建設にはマレーシア政府から8000ドルの援助があったそうので、覆い付きのセーマーは寺の格をしめすものである。庫裡は高床しき民家のトタン屋根で2棟。その他、礼拝堂。台所食堂、タイ語の学校にしていた講堂がある。現在は教えられる僧侶が入院中なので、休校中である。

僧侶の食事は村の人々が運んでくる。

仏塔、鐘楼。住職像。寺の奥にコンクリート製の舞台があり、ローイカトンなどの祭が行われるスペースとなっている。タクロー用のコート。小河川に接していてサゴヤシが生えている。

寄付像としては、仏立像（2000年代）観音像とその祠。ここには購入された観音像の他、小型の布袋像など華人系の像や寄付の壺などが並んでいる。寺とゴム林の境にルシ像があり、土地神として毎日拝みに来ているというゴム園労働の老人に出会った。ルシ像には、華語のおみくじなどが併設。



[写真155. 四名共同利用の庫裡]



[写真156. 建設中断中の本堂]



[写真157. ルシ像に祈る]



[写真158. バイセマー(覆い付き)]

## 15.ヤン

この地域にはタイ寺院は存在しないが、すべての郡の状況として記す。

地域の特徴：アロースターの南プンダンの西でマラッカ海峡に面した海岸沿いの低地水田地域である。標高が10mまでの水没多発地域であったが、18世紀から19世紀にかけて、クダースルタンや大臣による運河が縦横に建設さ

れて、水田地域としてほとんどマレー人の居住地域となっている。古い村落は低地内にわずかにある小丘陵の麓にへばりつくように集まっていたが、運河ができてから、運河沿いに、村落が並ぶ様になった。1911年の人口調査でも圧倒的にマレー人人口が多い。



[写真159. 低地水田の村落]



[写真160. 低地水田と運河]

## まとめ

以上のように訪問調査したタイ仏教寺院は42カ所に及ぶ。リストに見つからなかったものも若干ある可能性がある。例えば、住職のいない小さなサムナックソムがあり、地元シャム人による集会所と火葬場、市販の仏像を備えてトタン屋根でおおただけの箇所を一か所確認している。また、タイ仏教なのかどうか確認できない新宗派のつくった礼拝堂の存在が報告されているが、華人の多い地域にあり、これをシャム人と関連づけられるのかどうかは分からなかった。後人の調査に託したい。

クダーの寺院の分布は本稿の最後の地図に示した。その分布はクダーの内奥部に集中的に存在し、特に伝承の古い寺院はムダ川沿いのブキット・ペラ山の麓に集中している。付した地図では高低差がわからないが、クダーは海岸線から20km内奥に入ると標高がやや上がり果樹やゴムの林が登場してくる「ブキット（山、あるいは丘陵）」になる。都市部の少数寺院を除いて、タイ

仏教寺院とシャム人村落はこの丘陵部に著しく偏って存在している。現在の幹線道路に接している寺院は少なく、河川交通が主役でなくなってからはむしろ孤立的になってしまった場所にタイ寺院はあり、巡礼観光する華人も知らない場所がある。

クダー全域のタイ寺院はタイ国内のタイ仏教寺院と異なり、タイサンガの管轄外である。マレーシア政府はイスラーム以外の宗教施設には運営費の公開を義務づけその収支報告書がしばしば貼られていた。サンガの縛りが緩い結果「上座仏教寺院」としてはかなり自由な形態を見ることができる。

したがって寺院の類型を提示することは容易ではないが、あえてを試みるとすると、

シャム人村落コミュニティによって地元僧侶の出家とその生活がしっかり支えられ、外部からの寄付物、特に観音像などがいっさい無いタイプ。シャム人が強制移動時期を経験していない地域。

1950年代の村の強制移動を経験し、その後数年でその地に帰還したシャム人コミュニティに支えられているタイプ。しかし、移動先から戻らなかったシャム人家族もいて、寺が荒れた経験があり、再建が遅れている地域。

交通の要衝や華人の住む地域に近いなど、仏教徒としての華人の訪問が多く、寄付金や寄付像などが集まり、華人の民間信仰をも包摂しているタイプ。僧侶自身が華人でタイ語を話せない場合もある地域。

の三つぐらいがあげられ、1) から3) への間のバリエーションが多く存在すると言えよう。

さらに、ほかの特徴をあげれば、2000年以降に寺院施設の建て直しがおこなわれつつあり、その資金はクダーやペナンに住む華人、華人系シャム人などの寄付によっていることである。タイから僧侶を招聘し、新寺院施設の様式が僧侶自身、タイからの寺院建築技師の設計によるものに移行しつつある。これによりクダー独自の古い寺院建築は姿を消しつつある。寺院の建設は地元のシャム人と僧侶自身が労働者となる場合もあれば、タイから寺院建築をできる労働者を雇い、ほとんど地元シャム人は手伝わないというものもある。

一方、「仏教徒」としての華人がクダー州のタイ寺院を周遊訪問する「巡礼観光」的な要素もみられる。彼らは金品の他、僧侶の食事を持ってくる。また、都市部では納骨堂をタイ寺院内に寄付建設するというケースもみられるなど、華人との関わりが交通至便になった地域から進んでいるとも分析できる。華人の墓はマレー人の多いクダーでは場所を見つけるために苦勞する問題の一つである。本校では言及しなかったが、ペナンのタイ寺院2カ所ではその華人のための納骨堂と寄付物が奇妙なまでの光景を作り出している。

クダーのシャム人は、ながらく、マレーシアの「土着の民=ブミプトラ」でありながら、いわゆる代表的3民族の範囲外=othersとして認識されていた。現在でももちろん少数派であることはかわりないが、マレーシアは自国民を紹介する際にMalays, Chinese, Indian という他に近年からはothersと表記をはじめている。また、クダーのシャム人をまとめようとする協会の動きがあり、その組織は政治的にUMNOへの支持を表明するなど、イスラーム化勢力PASが政権を掌握しつつあるクダーの状況に非ムスリムとして反応したのもである。

少数派とはいえ、シャム人とコミュニティの中心としてのタイ寺院の動向はクダーという境域の性格分析に欠かせない存在であるといえよう。

## おわりに

「クダーにおけるシャム人とタイ仏教寺院：寺院調査から（1～4）」は2007年から2009年にかけて、調査者黒田が一人で何度かマレーシアを訪れ、クダー内寺院の全てを調査するという方式で行われた。寺院の場所はなかなかわからない場合も多く、また住職に出会えない場合もあり、歴史的な状況の聞き取りなど不完全である。文献としての資料がない上に住民がさほど歴史的由来に興味を持っていない場合もあり、特に1950年代の強制移住時代を経験した寺とその周囲の村では人口減少とコミュニティの崩壊が起こっているようにも感じた。一方で、ほとんどタイ語方言以外通じない環境の中で寺を中心とした生活が営まれている地域もあり、その様態は非常に多様である。

さらに、マレーシアでは個々の村落に関する歴史や伝承に関する文献資料はほとんど存在しない。インフォーマントの興味も少なく、いつまで聞き取りで資料が得られるのかも不明である。しかし、まだまだ不十分な村落史の調査や村民の移動経路などについて、今後さらに丹念な聞き取り調査ができる余地があることは否定しない。願わくば多人数による長期調査が行えることを望むものである。

#### 参考文献

Masaki Nakazawa, 1992 "Kg.Tas : a Rural Siamese Village in the State of Kedah ", *Local Societies in Malaysia vol1* .K .Miyazaki ed. 1992 ILCAA. pp-52-74)

Thamrong sak Aayuwathana 1974. *Thai nai Malaysia (Thai in Malaysia)* Roong phim kan Sasana Krungthep, Bangkok.

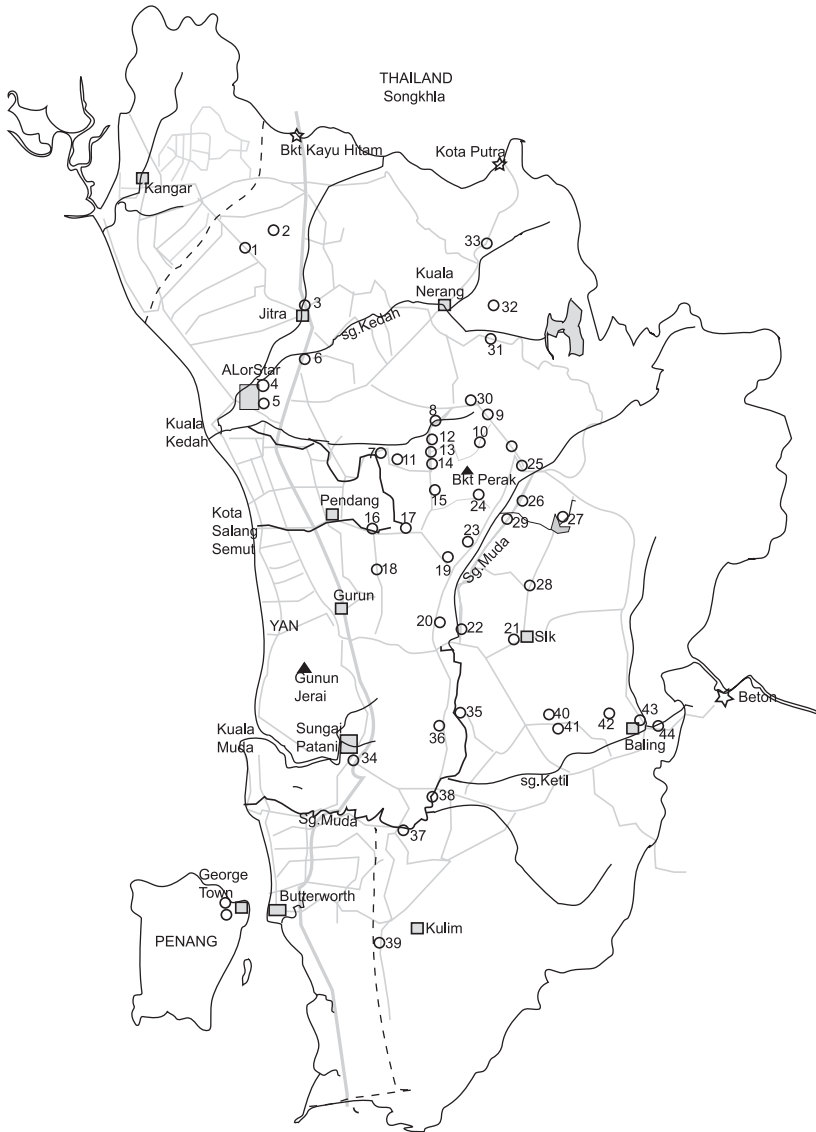
追記：本稿は科学研究費による「マレー境域世界におけるタイ仏教徒コミュニティの研究」（課題番号19510253）2007-2009 による成果の一部である。

## 資料 寺院名リストと地図（寺院番号が地図の番号に対応）

クダ-寺院名	番号リスト	Daera 郡
1	Wat Padang Sera (Wat Lelee)	Kubang Pas
2	Wat Gua Napai	Kubang Pas
3	Wat Sungai Bahru	Kubang Pas
4	Wat Bakar Bata	Kota Star
5	Wat Telok Wanja	Kota Star
6	Wat Bukit Pinang	Kota Star
7	Wat Senara	Pendang
8	Wat Lampam	Pendang
9	Wat Chang Deen	Pendang
10	Wat Lamdin	Pendang
11	Wat Nangka Siam	Pendang
12	Wat Nanai	Pendang
13	Wat Kg Cina (Pdg Kerbau)	Pendang
14	Wat Tong Phru	Pendang
15	Wat Titi Akar (Palee lamai)	Pendang
16	Wat Pdg Pusing	Pendang
17	Wat Pdg Peliang	Pendang
18	Wat Mak Inson (Maisong)	Pendang
19	Wat Bkt Perak	Pendang
20	Wat Kalai	Sik
21	Wat Cherok Pdg	Sik
22	Wat Begia	Sik
23	Wat Kura	Sik

24	Wat Sungai Siput	Sik
25	Wat Sungai kap	Sik
26	Wat Kubang Kesom	Sik
27	Wat Simpang Tiga	Sik
28	Wat Kg Cong	Sik
29	Wat Kuala Beris	Sik
30	Wat Naka	Padang Trap
31	Wat Pedu (Wat Tangjong)	Padang Trap
32	Wat Tanah Merah	Padang Trap
33	Wat Baru Padang Senai	Padang Trap
34	Wat Kg Raja	Sungai Patani
35	Wat Lengkas	Sungai Patani
36	Wat Bukit Selembau	Sungai Patani
37	Wat Tramadu (Oramadu)	Sungai Patani
38	Wat Tanah Lichin	Sungai Patani
39	Wat Kulim	Kulim
40	Wat Kg Tas	Baling
41	Wat Pagang	Baling
42	Wat Sirako	Baling
43	Wat Baling Nok (Paleelai)	Baling
44	Wat Baling Nai (Simpang Umpat)	Baling





MAP 1. クダー内のタイ仏教寺院分布図

